雌肉捕食！ヒグマ

【第１話】　裸にしてから喰う

　東京から北海道へとやってきた新人ライターの心菜（ここな・19 歳）。世間で騒がれているヒグマ被害に関しての取材のため、はるばるやって来た。ネットで入手できる情報もたくさんあるが、一次情報に触れておけという上からの指示でわざわざここまでやって来た。

　しかしすでに後悔している。来たいわけでもなかった。編集プロダクションの社長から行けと言われて嫌々来ただけなのだ。

　なんで人喰い熊がうろついてるところに行かなきゃいけないんだ……

　と思うものの、新人の心菜には選択肢はなかった。幸い

にも先輩ライターの朱美（あけみ・23 歳）も一緒に来てくれた。穏やかで優しい彼女は、心菜にとって頼れるお姉さんであった。

「ま、沙耶香さんが行けって言うなら、行くしかないね」

沙耶香（さやか）とは、心菜と朱美が所属している編集プロダクションの社長である。まだ 25 歳と若いが、活力と行動力に満ちたカリスマライター。

「そうなんですけどぉ〜〜、熊に襲われたらどうするんですかぁ〜〜」

となげく心菜。それもそうである。いくら仕事とはいえ、彼女たちは人喰い熊がいるであろう場所へと向かっているのである。

事件は立て続けに起きた。北海道にて行方不明となっていた中学一年生の少女（13）が後日、遺体となって発見された。行方不明となっていた舞子さん（仮名）の身体は、発

見当時損壊が激しく多くの部位が欠損していた。特にそれは腰部に集中しており、臀部・陰部・性器（外部）といった外側のみならず、直腸・膀胱といった排泄系の臓器、体内部の性器、そして太腿と乳房も喰い尽くされていた。

ヒグマの習性として、捕食する際に犠牲者の衣服を剥ぎ取り裸にしてから食べることが知られている。舞子さんの遺体も裸にされており、遺体の近くには彼女のものと思われる衣服が見つかった。破り捨てられたショーツにはヒグマのものと思われる唾液が付着しており、DNA 鑑定の結果、他の熊害事件の犯人と同一個体であることが分かった。

ヒグマは基本的には慎重な生き物で自分から人間に近づくことはないが、一度人間の味を覚えた個体は人間をエサだと判断して積極的に捕食するようになる。

事件現場からそう離れてはいない場所でも事件は起きていた。中学三年生の少女（15）もまた行方不明となっており、後日発見された玲奈さん（仮名）の遺体もまた発見当時損壊が激しく多くの部位が欠損していた。臀部・陰部・直腸・膀胱といった排泄系の臓器、そして性器・太腿・乳房も喰い尽くされていた。舞子さんのときと全く同じ状況だ。

近くには彼女のものと思われる衣服が破り捨てられており、玲奈さんも舞子さんと同じく裸にされた状態で貪り喰われたようである。破り捨てられたショーツにはやはりヒグマの唾液がついており、それが同一個体である決定的証拠となった。ヒグマは自分のエサだと判断したものへの執着が強く、一度狙われるとどこまでも執念深く追ってくる。

恐ろしいことに、これら２件の熊害（ゆうがい）事件が起こり近隣の学校は臨時休校となったにも関わらず、捕食被害が続いたことである。

ここには人災ともとれる側面もあった。かつて依頼を受けて熊を撃った猟友会メンバーに、猟銃所持許可の取り消し命令が下されたのだ。どう考えてもおかしな話だが、それにより猟友会はその後、駆除依頼がきても拒否するようになった。当然である。

なお、連続捕食事件の犯人であるヒグマは体長３メート

ルもある雄であることが分かっており、今後も被害が出る可能性が懸念されている。

　心菜はビビり散らかしていた。

「警察は？銃持った警官とかは？パトロールとかしてないの？」

　朱美は笑いながら答える。

「してるとこはしてるみたいだけど、全然人手たりてないらしいよ」

「えぇ～～……」

「それと、警察の拳銃で３メートル級のヒグマは仕留められるのかな～」

「出来ないんですかぁ？」

「分かんないけど。でも、でっかいサイズのヒグマを倒すんだったら、ライフルとかじゃないと難しいんじゃないかなぁ」

「詳しいですね」

「予習したから」

　といって微笑む朱美。

「予習……ですかぁ……」

「ちなみに、三毛別羆事件（さんけべつひぐまじけん）は予習した？」

「……あぁ～～っと、……え～～っと、あの、有名なやつですよね」

「そう」

「あぁ～～っと、……あんまり覚えてないです」

「最初…….になるのかな、最初の被害者が襲われて翌日遺体が見つかって、その時すでに身体の大部分が食べられてたんだって」

「怖ぁ～～」

「で、今回のヒグマはその事件の個体よりも大きいから、一日一人は食べちゃうかもね」

「怖ぁ～～～！」

　ビビり散らかす心菜とは対照的に、朱美はほのぼのとしながら喋っていた。どこか旅行気分なところも見受けられる。

「朱美さん、余裕ですね」

「ま～～……ね。どうせ行かなきゃいけないんだったら、楽しめた方が良いよね」

「朱美さんスタイルいいから、食べられちゃいますよ」

　たしかに朱美はスタイルが良く、豊満な肉付きだった。乳房も尻肉もたっぷりとした、ボリューミーな肉体をしていた。

「それ言うんだったら、心菜の方が真っ先に捕まって食べられちゃいそうじゃない？」

「えぇ〜……」

　たしかに心菜は普通の体つきで、サバイバルには向いてなさそうに見える。が、意外にも運動神経は悪くなく、高校時代も運動部で活躍していた。

「そんなことないですよ〜。野生の勘で切り抜けます！」

「野生？現代っ子でしょ、心菜」

「や、でも、けっこう動けます、私」

　そんなこんなで若い女性ライターが二人、現地入りした。ホテルにつくと、すでに現地入りしていた協力者から重要

な一次情報が得られた。が、それは見ない方が良かった。その一次情報とは、ヒグマが被害者を捕食しているところを撮影した動画データであった……